

## 28. 武田氏と城館遺跡

### 見学の重点

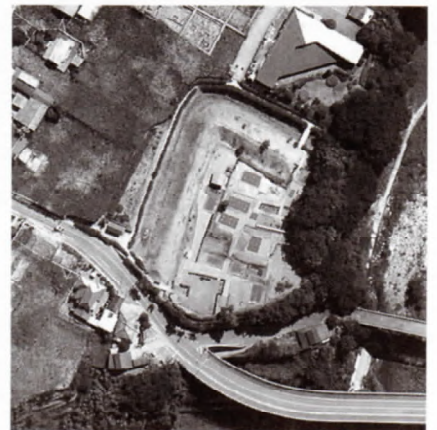
平安時代の終わりにになると甲斐源氏が甲府盆地一帯に進出し、やがて室町時代になると守護として甲斐国一円の支配を進めます。

- ① 戦国大名が他国との争いの中で、どのような城や館を造り戦に備えたのでしょうか。
- ② 権力を示すために国内や外国(中国など)からどのような貴重品を手に入れたのでしょうか。

清和天皇の血を引いた甲斐源氏は、大治5(1130)年頃に常陸国吉田郡武田郷に生まれた義清とその子清光が、乱行を理由に甲斐国市川荘(現在の市川三郷町の平塩岡)に流されたことに甲斐国土着が始まりました。平塩岡の館跡は不明ですが、中巨摩郡昭和町には義清神社や義清塚があり、盆地中央まで勢力を広げたと推測されます。清光は「逸見冠者」と名乗り、若神子城(北杜市須玉町)あるいは谷戸城(同市大泉町)などの八ヶ岳山麓に居を構えたといわれています。現在谷戸城は国指定史跡として整備されました。

清光には多くの子供があり、清和天皇の高貴な血統を得たいという地方豪族の利害と一致し、婚姻により盆地一円に勢力を伸ばしました。八ヶ岳山麓には逸見氏、葦崎に武田氏、南アルプス市に加賀美氏、奈古氏、秋山氏、小笠原氏、甲府市に一条氏、板垣氏、曾根氏、笛吹市に河内氏、石和氏、平井氏、山梨市に安田氏、中央市に浅利氏、南部町に南部氏などの子孫が勢力を広げ、後には穴山・下条・栗原・油川・布施・大井・仁科・勝沼や岩崎などの諸氏も出現しました。葦崎市では武田信義の館と思われる地が発掘されています。

鎌倉幕府成立時に甲斐源氏の活躍は目覚ましく、治承4(1180)年には源頼朝の使者と逸見山(谷戸城か若神子城など諸説)で会い、更に石和御厨で支援要請を受けると、10月に若彦道を越えて河口湖大石に至り、翌日には駿河目代を国境で破り、更に平氏を富士川合戦で破るなど大きな働きをしたため、駿河・遠江・信濃・安芸・陸奥など全国に勢力を強めました。しかし、この後鎌倉幕府により甲斐源氏一族の多くが滅亡させられました。この中で石和流武田氏は石和を根拠地として甲斐守護職を継ぎ、室町時代には信時流武田氏が守護職を握り、16世紀前半に信縄・信虎時代を迎えます。なお、永正5(1508)年に信虎が家督を継ぐと、有力各氏を押さえて甲斐領国の統一を果たし、続いて隣国との争いが盛んとなります。信昌・信縄・信虎3代の館は甲府市川田の川田館と推定されます。ここは甲斐国の交通網の要衝で、加えて、笛吹川やその支流の水運など要の位置にあります。甲州市勝沼町岩崎の岩崎氏館は武田信光の子信隆が岩崎氏を名乗りましたが、長禄2(1458)年に滅び、現在は館跡は堀や土塁が残ります。



上空から見た勝沼氏館跡

甲斐国の統一を成し遂げた信虎は、永正16(1519)年に躑躅ヶ崎に館を造営し、家臣団もこの地に集住させました。館は当初単郭でしたが、晴信の時に西郭が増築され、武田氏滅亡後に織田・豊臣氏などにより更に郭が増築されたと考えられています。国指定史跡武田館は現在発掘と整備が進められています。また、信虎の弟の勝沼五郎信友は甲州市勝沼町勝沼に館を構え、小山田氏や郡内地域からの出口を押さえる位置に大きな館を造りましたが、永禄3(1560)年に信玄に滅ぼされています。現在、勝沼氏館跡は国指定史跡として保存整備されています。

天正9(1581)年に武田勝頼は新府へ城を移しましたが、わずか3ヶ月程度で城を焼いて、小山田氏支配地に落ちる途中、甲州市田野の地で一族とともに滅びました。新府城は天正10(1582)年に徳川と北条氏の争いで徳川方の陣となりました。現在は国指定史跡として調査整備されています。



甲斐源氏諸氏が姓氏とした地名



## 29. 甲府城跡

### 見学の重点

このコーナーでは、甲府城跡について展示してあります。人形付鬼瓦、鯨瓦をはじめとした瓦を中心に並べてあります。

- ①甲府城は誰によってつくられたのでしょうか。
- ②甲府城にはどのような瓦が使われたのでしょうか。
- ③甲府城の中心部(本丸)はどこでしょうか。



甲府城は舞鶴城ともよばれ、現在の甲府駅東側周辺にありました。武田氏滅亡以後、豊臣・徳川氏系の人々により築城され、江戸時代を通じて甲斐国支配の拠点となりました。かつて一条小山とよばれた独立した小さな丘を利用してつくられ、石垣を積んで堀や城壁を築いた山梨県唯一の近世城郭といえます。

織田信長の死後、甲斐国を領有した徳川家康が平岩親吉に命じ、天正11(1583)年築城が計画されたといわれていますが、最近の研究では豊臣氏によって完成されたともいわれています。天正18(1590)年甲斐国は豊臣政権下に入り、甲府

城築城も羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長と豊臣系の有力大名に受け継がれていきました。特に、加藤、浅野父子の頃工事が進み、文禄3(1594)年頃にはおおよそ城の形が整いました。関ヶ原の戦い以後は再び徳川氏の城となり、柳沢吉保が城主の時代に城が大修築され、城下町も整備が進んで最盛期を迎えました。柳沢氏以後は甲府勤番が置かれ、幕府の直接支配が明治に至るまで続きました。

発掘によって出土した遺物の大部分は瓦です。築城当時の三ツ巴連珠文を施した軒丸瓦と、浅野家の家紋である違い鷹羽を施した軒丸瓦、唐草文を施した軒平瓦などが出土しました。そのうち、鯨瓦、五三の桐鬼瓦、五七の桐と思われる飾り瓦、人形付飾り瓦には、金箔が施されていました。金箔鯨瓦や飾り瓦は県の指定文化財となっています。鯨瓦と人形付飾り瓦にはさらに朱も施されていました。貼り付けられた人形は、風神と推測されています。

甲府城の石垣は、「野面積み」という方法で積みられています。この石垣を積む技術は、安土城の石垣に代表される技法で、大きな割石を小口積みにして積み上げることにより、しっかりとした高い石垣をつくることができます。

内堀に囲まれた内城には、最も高い所に本丸、そして二の丸のほか、東・西・南に3曲輪がつくられました。内城の南北に武家屋敷や甲府学問所が置かれた内郭、さらにその外側に城下町がつくられ職人や商人が集められました。内城の最も西に位置する西曲輪には、明治30年代に中央線が敷かれ、甲府駅や県庁が建設されました。中心となる本丸に天守櫓があった可能性はありますが、規模など具体的な姿は不明です。

これまでの調査から、甲府城は戦国時代末から豊臣氏の東国支配の一拠点とされ、それにふさわしい石垣普請が行われ、金箔瓦や桐文瓦が使われたことがわかりました。関ヶ原の戦い以後家康によって、管理され、豊臣政権の象徴である金箔瓦や桐文瓦、違い鷹羽瓦が廃棄処分されたのではないのでしょうか。この後、徳川氏によって西方からの攻撃に対する守りの城とされました。



甲府城跡出土鬼瓦



甲府城跡出土鯨瓦



### 30. 繁栄を極めた富士川舟運と鰍沢河岸

#### 見学の重点

江戸時代の交通路として、川を使った舟による交通が繁栄しました。山梨では鰍沢と静岡県いわぶちの岩淵かじかざわ(富士市)とを結ぶ富士川舟運があります。その舟の港として鰍沢河岸があります。

①鰍沢河岸跡の発掘品にはどのような品物があるのでしょうか。

古くから川を使った交通は各地で盛んでしたが、山梨では富士川を使った河川交通が江戸時代から明治時代にかけて繁栄しました。江戸時代のはじめ頃に京都の豪商角倉了以すみのくさりょういが、徳川家康の命により舟が往来しやすいように富士川を改修し、富士川舟運がはじまりました。山梨には幕府の役所が置かれていましたが、税金として集めたお米を、富士川舟運から静岡県清水港を経由して江戸に運び、商人に売ってお金に換え、運営資金にしていました。舟を停泊させ積み荷の上げ下ろしをした川の港を河岸と呼びます。鰍沢をはじめ、青柳、黒沢の3カ所に幕府のお米蔵が置かれ、三河岸と呼ばれ繁栄しました。特に鰍沢河岸は大きく、長野の松本藩や諏訪藩のお米蔵も置かれ、中馬と呼ばれる馬便で鰍沢まで運び込んでいました。

鰍沢河岸跡の発掘調査によって、商人たちが暮らした建物跡や井戸、石垣による区画が発掘され、江戸時代の古絵図と照合できるような地割りが確認されました。出土品には、古伊万里とよばれる佐賀県の肥前焼などの磁器が多量に出土し、繁栄を物語っています。泥メンコと呼ばれる江戸時代末から明治にかけての遊び道具、寛永通宝などの銭や甲州金なども出土しました。明治時代中頃から本格的に国内生産されたガラスビンなども重要な出土品です。明治になってからの鰍沢河岸は、明治36(1903)年に中央線(甲府-新宿間)、昭和3(1928)年に身延線が開通し、貨物輸送が鉄道によって担われるようになると、河川交通は役目を終えることとなります。



泥メンコ



初期のガラス瓶



古伊万里の磁器



鰍沢河岸発掘状況





# 周辺遺跡のご案内

当館の立地する甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園内には国史跡の甲斐銚子塚古墳(前方後円墳)をはじめ、丸山塚古墳(円墳)・上の正方形周溝墓群など様々な遺跡があります。公園内には遊歩道や遊具などが設けられており、緑豊かな自然の中で一日を通して活動をすることができます。博物館見学や体験活動と併せてご利用ください。

本書ではご利用の際の手引きとして公園内の主な遺跡についてまとめました。事前指導の資料としてご利用ください。



甲斐銚子塚古墳



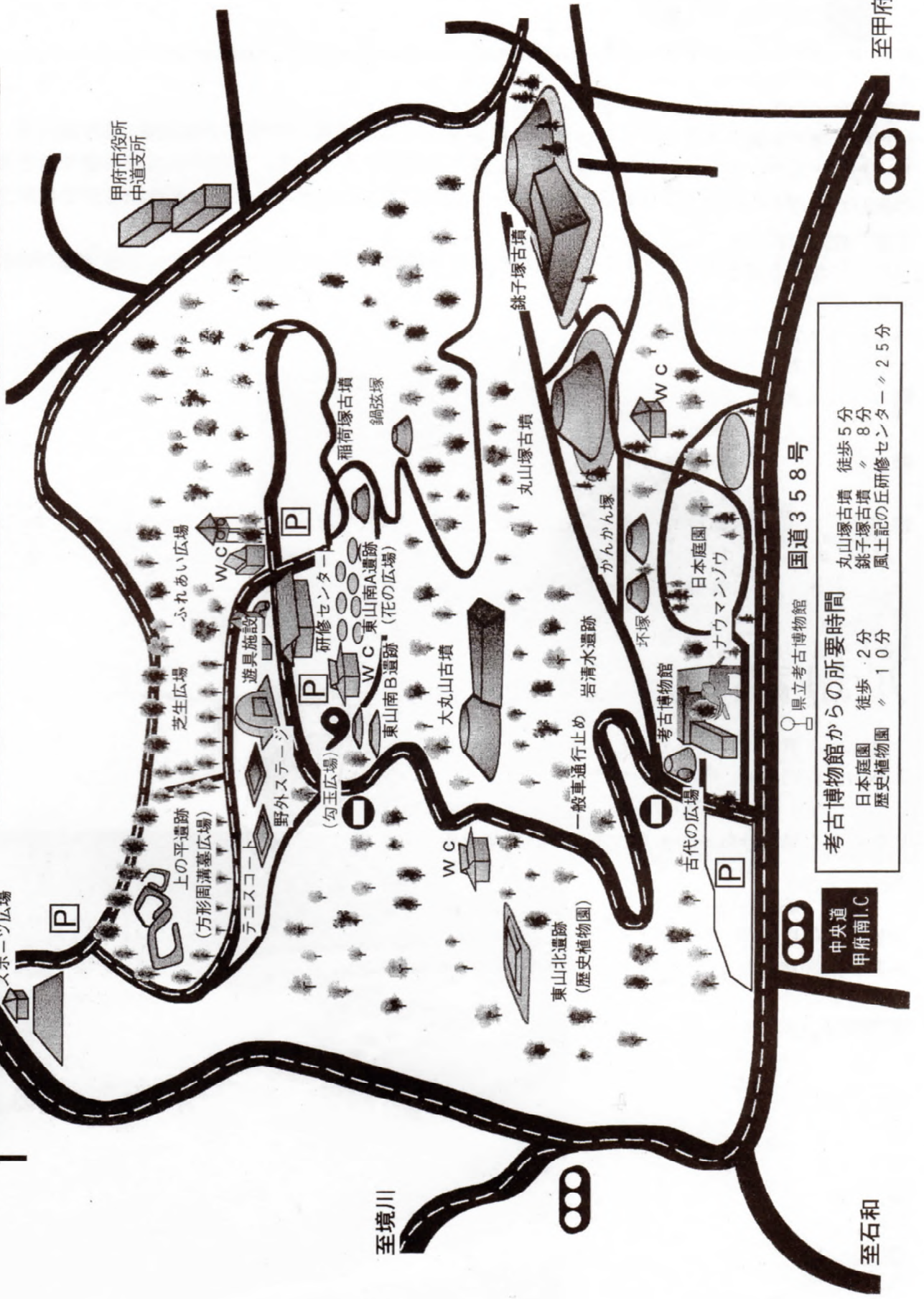
上の正方形周溝墓群





至精進湖  
スポーツ広場

# 甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園案内図



県立考古博物館 国道358号

**考古博物館からの所要時間**

丸山塚古墳	徒歩 5分
銚子塚古墳	〃 8分
風土記の丘研究センター	〃 25分
日本庭園	徒歩 2分
歴史植物園	〃 10分

中央道  
甲府南I.C



# 甲斐銚子塚古墳

ちょう し づか

古墳時代前期、4世紀後半頃造られた、<sup>たてあなし</sup> 竪穴式石室をもつ前方後円墳です。この古墳は県内で最も大きなもので、東日本でも最大級の規模を誇るものです。昭和3(1928)年に石室があげられ、中からたくさんの副葬品が発見されたことにより、昭和5(1929)年に隣の丸山塚古墳とともに国の史跡<sup>しせき</sup>に指定されました。昭和41(1966)年には石室の実測調査が行われ、また昭和58(1983)年～平成16(2004)年には古墳の整備にともない発掘調査が行われました。



それによると、銚子塚古墳は自然の地形を造成したもので、古墳の周囲には深さ1m～3mの溝がとりまいていました。また後円部は途中2カ所に段があり三段積みの形に、前方部は二段積みの形に造られていたこともわかりました。副葬品<sup>ふくそうひん</sup>(遺体と一緒に埋められた品物)等からは、この古墳に葬られていた人物が、ヤマト王権と深いつながりをもっていた古代甲斐国の王ともいべき人物であったことがわかります。なお、<sup>しゅうこう</sup> 周溝内からは木製品が多量に出土しました。

- 古墳の大きさ 全長169m、後円部直径92m・高さ15m、前方部幅68m・高さ8.5m、周囲の溝の幅15m～25m
- 石室 割り石を小口積みした竪穴式石室、長さ約6.6m・幅約0.9m、高さ約1.35m
- 遺物 (副葬品)銅鏡5面、<sup>まがたま</sup> 勾玉、<sup>くだたま</sup> 管玉、<sup>とうけん</sup> 刀剣、<sup>いしくしろ</sup> 石釧など [東京国立博物館蔵]  
(埴輪) <sup>えんとう</sup> 円筒・<sup>あさがわ</sup> 朝顔形・<sup>はにわ</sup> 壺形埴輪  
(土師器) <sup>こうえんだいつきがめ</sup> S字状口縁台付甕  
(木製品) <sup>もくちゆう</sup> 木柱、円盤形木製品、棒状木製品、工具等

# 丸山塚古墳

まる やま づか

丸山塚古墳は、5世紀のはじめ、古墳時代中頃に造られた円墳で、<sup>えんぶん</sup> 円墳の中では県内で最も大きいものです。明治40(1907)年に偶然の機会から竪穴式石室があげられ、中から多数の副葬品が発見されました。昭和5(1930)年には銚子塚古墳とともに、国の史跡に指定されました。昭和59(1984)年に公園の整備にともなう発掘調査が行われ、周囲に幅20m、深さ1m～2mほどの溝がとりまいていたことや、埴輪<sup>はにわ</sup>がたてられていたことなどがわかりました。丸山塚古墳はその大きさや位置から考えて、銚子塚古墳に葬られた豪族の後を継ぐ立場の人物の墓であり、甲府盆地一帯を支配した首長の墓と考えられます。

- 古墳の大きさ 直径72m、高さ11m
- 石室 竪穴式石室、長さ約5.5m、幅約1m、高さ約0.7m
- 遺物 銅鏡、鉄剣、<sup>てつかま</sup> 鉄鎌、<sup>てつぷ</sup> 鉄斧、石釧など [東京大学蔵]、埴輪片



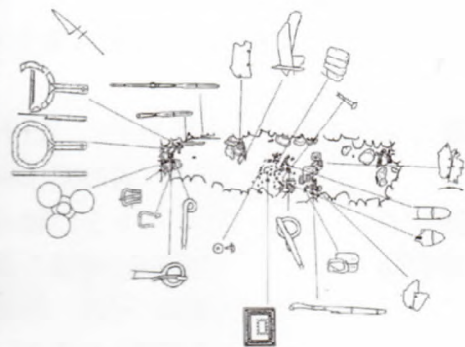


# づか ちゃづか かんかん塚(茶塚)古墳

博物館西側の日本庭園の中に2つの塚が見られますが、その右側(西側)がかんかん塚(茶塚)古墳です。発掘調査の結果、5世紀後半の古墳であり、大きさ東西21m、南北26mの楕円形をしています。銚子塚古墳や丸山塚古墳の後を継ぐ立場の豪族の墓と考えられます。またこの古墳の竪穴式石室からは、県内で最も古い馬具が見つかっており、馬に乗り甲府盆地を駆けた古代の支配者の姿を彷彿とさせます。



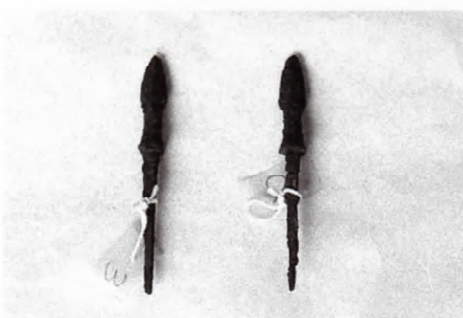
- 古墳の大きさ 直径 21m × 26m
- 石室 竪穴式石室、長さ 4.5m 幅 1m、高さ 0.7m
- 遺物 武具(短甲<sup>たんこう</sup>や挂甲<sup>けいこう</sup>、冑<sup>かぶと</sup>などの部分、剣、鉄の鉾<sup>ほこ</sup>、鉄鍬<sup>てつぞく</sup>など)、馬具(三環鈴<sup>さんかんれい</sup>、輪鏡<sup>わふみ</sup>、轡<sup>くつわ</sup>など)



出土状況

## つきづか 坏塚

博物館西側の日本庭園の中にある2つの塚のうち、左側(東側)が坏塚です。坏塚は、円形または隅が丸い方形の塚と考えられています。塚の周りには溝のようなものがめぐらされており、直径はおよそ15mです。墳丘の作り方は通常古墳とは違い、土をあまりたたきしめずに半球状に積み重ねています。墳丘中央の地表から50mほど下のところに、拳大の礫が1m四方ほどの広さに敷き詰められているのが確認されています。その礫の中から16世紀前後の時代に使用されたと考えられる鉄鍬が5本出土しました。これらの結果から、坏塚は以前考えられていたような古墳ではなく、中世以降にはじめから供養塚としてつくられたものだという事になりました。



出土した鉄鍬



礫がしきつめられている様子